

編 集 後 記

伝統ある本誌の編集委員を昨年より拝命しました。コロナ禍でなかなかご挨拶できませんが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。実は私、昔から本誌が好きでした。論文を拝読して自分が診ている疾患と同じ疾患だということに気づき、診断に至ったケースも何度かありました。今回からは編集委員として携われることになり大変光栄に思いますし、沢山論文を拝見する中で少しでも皆様のお役に立てればと思います。

さて、このような文章を書くのは初めてですが、立派なことを書ける立場ではございませんので、日頃思っていることを勝手に書かせて頂きます。一つは、日本における科学的なものの見方についてです。皆様はお気づきとは思いますが、テレビ、ネットニュースなどで、特に新型コロナウイルスについては、全く科学的ではない言説が未だに多数存在します。関東大震災のあとデマが広まって大変だったという話を小学校の頃習ったのにかかわらず、です。科学的には了解不可能なルールも多数存在しますし、検証がなされないまま仕組みだけが変わることも皆様多数経験されているのではないかと思います。第二は我々医師の孤立

化と言っても良いような状況が起きているのではということ。診療科の壁、病院間の壁、医局間の壁、地域の壁、国際的な壁、色々なレベルで壁が存在する訳ですが、コロナ禍において特に病院間以上の壁が高くなってしまいました。この2年強、多くの先生方が多くの創意工夫をされて乗り越えてこられたのではないかと拝察しますが、新型コロナウイルスを過度に恐れることなく適切な診療・教育・研究を進めるにあたり、他の病院ではどのようにしているのかを知る機会も少なかったように思います。創意工夫はエビデンスレベルという意味では低いのかもかもしれませんが、その情報に触れられないことで誰もが最適解を探して同じように失敗し続ける危険性もあるかもしれません。創意工夫の芽を摘むことは将来的なエビデンス構築の機会を失うことにもなりかねません。多数の事例を学ぶことから、科学的な視線を基に最速で最適解を導くために、皆様のお力を上手に集約する良い方法がないものかなといつも思っています。

(石浦浩之)

〈 編 集 委 員 〉

編集委員長	小野寺 理	編集副委員長	三澤 園子		
編集幹事	石浦 浩之	漆谷 真	杉江 和馬		
編集委員	今井 富裕	木下 真幸子	古賀 政利	櫻井 圭太	柴田 護
下畑 享良	鈴木 匡子	辻野 彰	坪井 義夫	中嶋 秀人	新野 正明

「臨床神経学」	第62巻 第5号	2022年5月1日発行	
編 集 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル	一般社団法人日本神経学会	
発 行 者	東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル	戸 田 達 史	
印 刷 所	〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入	中西印刷株式会社	

発 行 所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル
日 本 神 経 学 会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>